序章　起源

序章 起源

母なる川

新潟市は、越後平野のほぼ真ん中、信濃川と阿賀野川が日本海に注ぐ場所に位置します。信濃川は全長367㎞の言わずと知れた日本一の長江です。阿賀野川も尾瀬から流れる只見川を含めると長さ210㎞に及ぶ大河です。この二大河川がもたらす水と土によって越後平野は生まれました。信濃川と阿賀野川は、文字通り母なる川―Mother River―といえます。

信濃川と阿賀野川が運ぶ莫大な量の土砂は河口を浅くし、季節風で吹き寄せられることで、やがて砂丘ができました。現在、平野には海岸線にほぼ並行して、細長い砂丘列が10本ほど走っています。砂丘は内陸に行くほど古くなります。

最も内陸側にある亀田砂丘からは、縄文時代前期(約6,000年前)の土器が見つかっています。太古の昔から、すでに新潟の人々の営みがあったのです。もっとも、市域南部の新津丘陵からは、後期旧石器時代(約２万年前)の狩猟具が出ています。人々が生活の舞台を丘陵から砂丘に広げていったことがうかがえます。

新潟の始まり

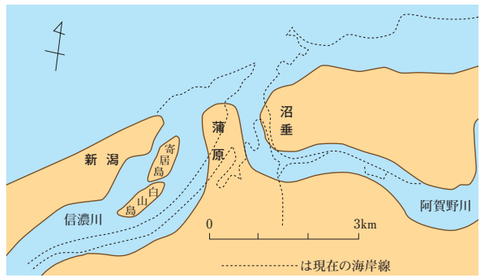
７世紀末、国・郡・郷を単位とする地方制度が整い、越後国が成立します。平安時代に完成した延喜式という法令集によると、越後国の国津(くにのつ)(公的な港)は、信濃川河口右岸の蒲原津(かんばらのつ)であったことが分かります。

新潟の地名が記録に現れるのは、戦国時代になります。蒲原津に、阿賀野川河口(現在の通船川河口)右岸の沼垂湊(ぬったりみなと)、信濃川河口左岸の新潟津(にいがたのつ)が加わり、合わせて三か津と呼ばれました。

越後の戦国大名・上杉謙信は、この三か津に代官を置き、流通や軍事の拠点としてこの地を掌握しました。新潟津ができてからは、蒲原津は次第に活気を失い、新潟津が信濃川・阿賀野川河口を代表する港になっていきます。

天正９(1581)年、阿賀北の武将・新発田重家(しばたしげいえ)が新潟津を占拠したことを発端に、謙信の後を継いだ上杉景勝(かげかつ)との間で、激しい戦いが繰り広げられます。天正14(1586)年、５年余りの戦いは、町民の助勢を得た上杉軍が勝利し、翌15年には越後国を統一します。

その後慶長３(1598)年、景勝は豊臣秀吉に会津(福島県)への国替えを命ぜられました。景勝が去った後、新潟湊は長岡藩領、沼垂湊は新発田藩領となりました。



三か津のころの河口付近・推定位置関係　「新潟市のあゆみ」から転載

都市形態を整える

新潟が本格的な都市機能を持ち発展するのは、江戸時代初期の元和２(1616)年、長岡藩主・堀直寄(なおより)の支配下に入ってからになります。堀は、新潟湊の競争性を高めるため、９種類の税金を免除するなどの保護政策を打ち出し、新潟町に新町、材木町、洲崎町の町建てを命じました。堀による治世は２年と短かったものの、基本方針はその後長岡藩主となった牧野忠成をはじめ、歴代の長岡藩主に引き継がれます。

寛永８(1631)年に阿賀野川が信濃川に流れ込み、合流してしまう異変が起きました。阿賀野川の旧河口は土砂で埋まり、信濃川も河道が変わったり浸食されたりして、新潟湊はほとんど機能を失ってしまいます。やむなく牧野は新潟町の移転を幕府に申請、明暦元(1655)年、信濃川の中に発達した寄居・白山島と呼ばれた洲島(すじま)に町を移転させたのです。

新しい新潟町には、交通上の動脈として南北に片原堀(後の東堀)、寺町堀(後の西堀)、東西に白山堀(後の一番堀)、新津屋小路堀(後の二番堀)、御祭堀(後の五番堀)などの堀が造られました。堀と道路が縦横に走り、寺町が整備された新潟町の骨格はこの時出来上がったといえます。

一方で新潟町の対岸、阿賀野川右岸にあった沼垂町も、度重なる地形変化の影響を受けます。貞享元(1684)年に信濃川右岸の現在地に落ち着くまで、半世紀の間に４度の移転を余儀なくされました。

母なる川に抱かれた新潟町は、肥沃な沖積平野の恵みを享受し、時には翻弄(ほんろう)されながらも物資集散地の河口港としてたくましく生き続けました。

新潟湊の繁栄

明暦年間(1655～1658)には日本海から下関を経て大坂[*1]へ至る、西回り航路が幕府によって整備されるようになりました。下越地方一帯から会津地方までの豊かな背後地に恵まれた湊町・新潟は、その寄港地として隆盛をみます。最盛期の元禄10(1697)年には、新潟湊に入港した回船が40カ国余りから3,500隻を数えるほどの盛況でした。

しかし、その繁栄もまた暗転します。享保16(1731)年、阿賀野川流域にあった低湿地の悪水抜きを理由に、新発田藩が松ケ崎に開削した堀割が洪水で破壊され、信濃川河口付近にあった阿賀野川本流が、直線的に日本海へ注ぐようになったのです。この影響で、信濃川河口には大きな浅瀬が出現し、千石船などの大型船が湊に入れなくなる事態に陥ってしまいました。沖合まで解(はしけ)を使って積み荷を扱うといった状態となり、湊の運営に多大な支障をきたしました。洪水による凶作なども重なりますが、母なる川は新潟町に多くの光と影を落としたのでした。

堀直寄の町建て令

＊１　大坂：現在の大阪市のもと。明治元年ころから「大阪」が正式な表記となった。

文化年間(1804～1818)になると再び日本海の海運が隆盛期を迎えます。幕府の政策で蝦夷地(北海道)との結びつきが強化され、新潟湊でも海産物の移入が急増したこと、越後からの函館回米も増加したことなどがあって、活気が戻りました。

近代の始動

天保14(1843)年、新潟町は長岡藩から離れて幕府の直轄地になりました。新潟湊を舞台にした薩摩藩の抜け荷(密輸)が発覚したこと、幕府が新潟を海岸警備の拠点として強化することなどが理由でした。

幕府領となった新潟町には初代の奉行・川村修就が赴任しました。川村は、堀の両側に柳を植えるなど街並みの整備にも力を注ぎ、飲み水にも関心を示していました。

安政５(1858)年、日米修好通商条約によって、新潟港は日本海側唯一の開港場に選ばれました。しかし、このころ河口付近の水深が浅いことが問題になりました。船舶の出入りに支障をきたすなどの理由から、各国と折衝の末、10年後の明治元(1868)年、ようやく開港にこぎつけました。

翌２(1869)年には運上所(税関)の建設を皮切りに、イギリス、ドイツ、オランダ、アメリカの領事館も開設されて新潟町にも文明開化の波が押し寄せました。町には洋風の建物も増え、同５(1872)年には繁華街に石油ランプの街灯がともります。開化政策に沿った町の改造が急速に動き始めたのでした。

明治時代の幕開けとともに、世界に開かれた港としてスタートを切った新潟。そこに近代水道がうぶ声をあげるまでには、さらに40年以上の歳月を要することになります。

外国調査船の来航と警護の諸藩を描いた「新潟湊之真景」